

『かげろふ日記』下巻の性格

—天禄三年の日録的記事の検討から—

宮 田 京 子

「かげろふ日記」下巻は、中巻末部の心境を引きつぎ「諦観」の域に達したことを伺わせるとされる日録的な記事の連続によって始まる。そこでは道綱母の激情は影を潜め、穏やかな色調を帯びた世界が展開されていく。確かに、鳴滝参籠を経た後の中巻末部における道綱母の心境には明らかな変化が認められる。それは、兼家の妻としての立場の変化に対する客観的認識の萌芽である。そして、それを承けて、「今年は天下に憎き人ありとも、思ひ嘆かじ」という決意が示す通り、苦惱を乗り越えた新たな世界としての下巻が指向されることになる。

しかし、下巻は、本当に、苦惱を乗り越え諦観に至り着いた作者の心境をそのまま反映した世界と受けとめることができるのだろうか。下巻については全く相反する二様の解釈がなされているが、それは、「中巻末部に到達した作者の心境の身辺雑記的な方向への分散」^{註2}「書くことの必然性を失った境地」という消極的な理解と方向を同じくする考え方であろう。しかし、同時に、「兼家との直接的な関わりを中心としたいわば求心的方法が、下巻に至って遠心的方法に転化したにすぎず、つまるところ極めて蜻蛉日記の世界を顕現

している」^{註4}と積極的に解釈する考え方もある。下巻がこうした対立的な二様の解釈を可能ならしめている原因は、日録の記事以下、物語的性格を有する養女迎え・遠度の求婚、私歌集的と言われる道綱の恋愛歌群というように記事が多様化している点にある。しかし、そういった主題の分裂とも言われる多彩な要素を多分に盛り込みつつもなお下巻が書き続けられねばならなかったことの意味を考えるに、その最初に描かれる日録の記事の中から、諦観に至り着いた結果ではなく諦観を確立せんとする営み、言わば、作者の積極的な「書く」必然性を内包した姿が読み取れるのではないだろうか。そこで、本稿では、日録的と言われることの一つの要因でもある天象の記述を詳細に読み説くことによって、その点を明らかにしてみたい。

本作品における天象の叙述は、伊藤博氏が、その散文部分に見られる自然に関する叙述を五つに分類された中に、「天候の記録」として挙げてあることから明らかに、これまでは自然に関する叙述の一端として考えられて来た。しかも、それは、「描写」という評価ではなく「記録」という理解に留まるものである。しか

「かげろふ日記」下巻の性格 —天禄三年の日録的記事の検討から—

し、本作品の構成面から見て、物見遊参といった開放的な状況における風景描写と閉ざされた空間である狭い屋敷内で感知された天候の叙述とは、全く同一線上には考えにくい。加えて、風景の描写と天候の叙述とは同じ自然界に取材した素材ではあっても、自ずと性質の異なる部分も存すると思われる。自然描写の中から天象の叙述だけを取り出すことよって見えてくる特徴があるのではなからうか。

そこで、該当箇所を取り出して、いくつかの観点から分類してみよう。まず、本作品において雨の描写が多いことについては既に指摘があるが、^註もう少し範囲を広げて、人事に障りのあるものとそうでないものとの分類、又、旅先か屋敷内かといった道綱母の居所からの分類、そして、多田一臣氏が「〈歌〉の表現の限界性」と言われたように、^註その感動が和歌という形で収束されていくものと散文の形で表現が完結されているものとの意味の違いということから、和歌につながるものとそうでないものという分類、以上の三点を考える。そうすると、人事に支障となる天象、即ち、雨・風・雪・曇・霜・霰・暑さ・寒さと、それ以外の天象としては、前者の方が圧倒的に多い。私見によると、前者が八十九箇所、後者が僅か十箇所ということになる。勿論、激しい風雨や厳しい寒暑といった天象の方が、人の意識に上り易いという点からすれば、もっともな結果とも言えよう。ところが、「晴れ」に代表される人事に障りとはならないような天象の方に注目してみると、わずかな分量とは言え、その分布にはある偏りのあることが分かる。それは、上巻安和元年の初瀬参詣における

① 日の脚のわづかに見えて、霧ところどころに晴れゆく。
② 「……御車の月の輪のほどの日にあたりて見えつるは」
の二例と、中巻天禄二年の鳴滝参籠における

③ 道にて雨もや降らむ、神もや鳴りまさらむと思ふに……晴れて、

の一例を除けば、他は全て、下巻天禄三年のしかも日常の世界にか描かれないという偏りである。その天禄三年の全用例を列挙してみると、次のようになる。

④ 晴るる顔の空はしたれど、こちあやしうなやましうて暮れはつるまで、ながめ暮らしつ。(天禄三年二月)

⑤ さて、日晴れなどして、八日のほどにあがたありきのところに渡りたるに、(同)

⑥ いかなるにかありけむ、このごろの日、照りみ曇りみ、いと春寒き年とおぼえたり。(同)

⑦ このごろ、空の気色なほりたちて、うらうらとのどかなり。暖かにもあらず、寒くもあらぬ風、梅にたぐひて鶯をさそふ。

(同)
⑧ それよりのち、天晴れたり。(同 閏二月)

⑨ 東面の朝日の気、いと苦しければ、南の廂に出でたるに、(同 六月)

⑩ 時雨だちたるに、未の時ばかりに晴れて、(同 八月)

同じ下巻でもこのような好天候の叙述は他の天延元年・二年には一切見られない。しかも、それらは、先の①②③の例と比較してみると、性格的に大きな相違が見られる。即ち、①は初瀬参詣からの帰

り、「来しかた見えずたちわたりて、いとおぼつかなし」と思われ難決していた霧が日の光によって解消されていくという、霧の状態への関心から導かれたものである。霧という現象が無ければ記されることも無かつたかもしれない叙述と言えよう。又②にしても、

「晴れ」という現象そのものに目が向けられているのではなく、道綱母の乗った車が近い未来の幸運を予期するかのように日の光に照り映えているという従者の追従の言であるから、車輪を輝かす要因としての日の光である。更に、③は、一種日常的世界を具現化しているとは言われるものの、それはあくまで「日常的」であって、「日常」ではあり得ない鳴滝参籠中の叙述で、一子道綱を一人京に送り出している折も折、突然の雷雨が起こりその身が案じられるという状況の下、天気が好転することによって心配が解消されたという経過を述べるものである。従って、ここでの天象に関する叙述は、あくまで、副次的要素でしかない。そして、いずれもが、自邸を離れた非日常的世界という特殊な条件下で感知されたものである。そうすると、外出の折、天象への関心が深いのは自然なことであるし、屋敷内を出るということは描写素材としての自然界の中に自己を同化させること或はそれに近づくことに他ならないわけだから、そこにおいて感じとられた天象は、道綱母の心象表現にとって大きな役割を持つとは捕えがたい質のものと考えられよう。

それに対して、下巻は、④⑥⑦を見ると明らかなように、天象の変化そのものが一つの素材として興味を持って描かれるように変わる。言わば、単なる記録ではなく、描写である。そして、上中巻の例とは対照的にすべてがつれづれの日常の中で捕えられる。このよ

うに、自然界から切り離された空間と言ええる屋敷内で穏やかな天象が殊更関心を持たれるからには、上中巻の場合とは違ってより恣意的なものがあるのではなからうか。特に、本作品の場合、雨に代表される悪天候の叙述は下巻に至っても全てに見られるのに、好天候の叙述は天禄三年の前半部分にしか見えないのである。なぜ、天禄三年の日常の記事にのみ、春のうららかな天気や夏の好天が記されるのだろうか。確かに、「日記」の概念が拡大されたところの「かげろふ日記」上・中巻を執筆し終えたことによつて、記録としての日記の形態が身近になったという理由は考えられよう。しかし、単に記録日記の要素が加味されたというだけではなく、そういう現象を導くに至った作中道綱母の心理・作者道綱母の意図というものがあるのではなからうか。

そこで、本作品中に圧倒的に多い雨を中心とする人事に支障となる天候の方を詳しく検討してみたい。上巻には九箇所が挙げられるが、その中の七例までは和歌につながる詞書的なものである。又、他の二例も自宅外で感知されたものであるから、天候そのものを記すことが目的とされる日常の世界における用例とは、性質が異なる。中巻では、全三十一例が数えられるが、第二一年目の安和二年はそのうちの僅か二例と非常に少ないし、内容的にも上巻の性格を引き継ぐ和歌の詞書の役割を果たすものではない。それ以降の中巻の世界では、詞書的というでもないが、和歌を導く契機となっていて、やはり、その天候表現のみにて叙述を完結している訳ではないというものが、六箇所数えられる。又、物語でという非日常的世界における例が十五箇所ある。そして、残った八例が日常の世界

での例である。その八例を挙げてみると、次のようになる。

⑭さらば、いと暑きほどなりとも、
(天禄元年七月)

⑮今日の昼つかたより、雨いといいたるはらめきて、あはれにつれ
づれと降る。
(同 十二月)

⑯今日は二十四日、雨の脚いとのどかにて、あはれなり。
(天禄二年二月)

⑰長雨になりぬれば、草ども生ひこりてあるを、

(同 五月)

⑱雨いといたく降る日、
(同 八月)

⑲今朝も見出だしたれば、屋の上の霜いと白し。……「あなきむ、

雪恥づかしき霜かな」と
(同 十月)

⑳いみじき雨のさかりなれば、音もえ聞こえぬなりけり。……

夜の間に雨やみにためれば、
(同 十二月)

㉑雪なむいみじう降るといふなり。
(同 十二月)

ここで、⑩は、石山参詣の理由の一つとして作者が挙げた夏の酷暑である。これは、感じ取られたのは日常の場であるにしても、夫の途絶えの為ふき込む道綱母に対し侍女が寺参りを勧めることから感知されるに至ったものであるから、それを感じ取った意識の中には、半日常的な要素が含まれていると見るべきであろう。そうすると、本作品の日常の世界で天候それ自身が目的として記された初めての例は、⑩「今日の昼つかたより、雨いといたるはらめきて」ということになる。そこで、注目したいのは、ここに、「いといたる」という形容が付されていることである。この描写が、聴覚的描写であることについては別に述べたことがあるが、上・中巻の、雨

を中心とした人事に障りとなる天候の叙述においては、雨にしても風にしても殆どが激しい状態のもので占められるのである。例えば、先の例で激しさを表す形容には傍線を引いたが、「はげしく」「いといたく」「いみじき」「音もえ聞こえぬ」と激しさ・荒々しさを表すものばかりである。中巻三十一例中、このように激しさを表す形容が付されているものは、二十三例に及ぶ。上巻の場合も、全九例のうち六例がそれで、「いと」とか「いたう」という言葉ではないが、その凄さを「野分のやう」「一日の風は、いかにとも、例の人とはひてまし」という表現によって表すものも含めれば、実に九例中七例までが激しい天候の叙述ということになる。そして、又、それ以外のものは、対極的におだやかさを表すものであるのかと言うと、決してそうではない。単に、「雨の降りける気色にて」「なほ雨やまで」と書かれるだけである。例外的に、波線を引いた「つれづれと降る」という描写と「いとのとどかにて」という描写が、おだやかさを表すものとして上・中巻を併せた中に二例だけ出て来る。しかし、前者は、先に「いといたるはらめきて」という激しさで降る雨が意識され、その意識の連続の内に取られた表現であり、又、後者の方も、まず「雨いたく降り、東風はげしく吹きて」と意識された雨が降り続けていることを指すものであるから、二例とも、初めから穏やかな雨として感知されたものではない。

それが、下巻になるとどうかと言うと、天禄三年の世界では、荒々しい描写は、殆ど影を潜めてしまう。下巻天禄三年の用例は、全部で十九例を数えることができるが、そのうち、荒々しさを表すものは、「あかつきがたに、松吹く風の音、いと荒く聞こゆ」「日こ

ろ、いと風はやしとして、南面の格子はあげぬを、今日、かうて見出だして」「川水まさりて、人流るるといふ」の三例のみである。もつともそのうちの二例は、大雨による被害の噂、今日まで格子を開めていた理由としての先日来の風という間接的なものであるから、道綱母が捕えた激しい天候の例は実質一例ということになる。そして、代わってこの天禄三年では、次のような描写が集中して取られるようになる。

①雨いとどかに降るなり。(天禄三年二月)

②雨よいほどにのどやかに降りて、(同)

③午時はかりより雨になりて、しづかに降りくらすにしたがひて、(同)

④雨のどやかに降るに、(同)

⑤雨のどかなり。(同)

⑥昼つかたより雨のどかにはじめたり。(同)

下巻は、全体から醸し出される雰囲気そのものに穏やかさ・長閑かさが感じられることは確かだが、このように、「のどかに」「のどやかに」「よいほどに」等と言った修飾語が付けられてそれが強調されるといふことは、この天禄三年にしか見られない現象である。

後の天延元年・二年の天候には一度もこういう言葉は使用されていない。それどころか、天延元年・二年になると、むしろ、荒々しい天候を強調するような修飾が付されるように逆戻りしているのである。即ち、天延元年の悪天候の例は、全五箇所と用例の総数自体が少ないのだが、「雨風いふかたなう降り暗がりて」という賀茂参詣の折の描写に一例荒々しさを表す修飾語が見られる。次の天延二年

は、十五例中、四例が激しい天候である。しかし、「のどかに」「のどやかに」という穏やかさを強調するような言葉が添えられることは、決して無い。もつとも、春二月三月という季節柄を考慮する必要はあるが、例えば、中巻天禄二年二月には、「二日ばかりありて、雨いたく降り、東風はげしく吹きて、……雨間もがなと思ふまに」という激しい雨の描写はとられても、「のどか」は前述したように例外的に一例使われるだけに過ぎないし、下巻天延二年二月も、「雨いふかたなけれど」とは書かれても、「のどか」とは決して描写されない。又、天象関係に限らず、「のどか」「のどやか」の使用例を見ると、上巻八例・中巻六例・下巻八例という結果になって、下巻だけに多用されているというものでもない。そして、その下巻八例のうちの六例が①から④の用例であり、残った二つのうちの一つも天禄三年二月のものであるから、下巻は、八例中七例までが天禄三年二月三月に集中して使われていることになる。となると、この現象は、作者の無意識のうちにその穏やかな心境が反映された結果とは言えないのではないだろうか。やはり、作者の意識的な操作を見るべきではないかと思われる。一端辿り着いた諦観が長持ちせず天延元年・二年になって決意がくずおれたとするならば、それは、諦観に至り着いたとはとても言えないだろう。つまり、意識的に作者は穏やかな雨の描写を取ったと思われるのである。それでは、作者にそういう偏りを取らせたものは、一体何だったのだろうか。そこで、その雨の描写に込められている道綱母の心情の面から次に考察してみたい。

下巻の雨の描写については、三田村雅子氏によって、「兼家の訪

れないことを必然化する理由であり、言いわけともなつて、のどやかな心境と觀察の余裕を与える」と解釈されるが、基本的にはその通りだと思われる。しかし、そういつた姿勢を、その出現からの推移に従つて更に細かく見てみると、いくつかの段階がある。まず、中巻天禄元年十二月十七八日の雨の描写に伴う道綱母の心情以降鳴瀧參籠に向かう前までの叙述で一区切りとすることができる。そこには六箇所の風雨の叙述があるのだが、兼家に対する意識が、併せて次のように描かれる。

今日の昼つかたより、雨いといはらめきて、あはれにつれづれと降る。まして、もしやと思ふべきことも絶えにたり。いにしへを思へば、わがためにしもあらじ、……雨風にも障らぬものとならしたりしものを、……あはれ、障らぬものと見しものを、それまして思かけられぬと、ながめ暮らさる。(天禄元年十二月十七八日)

これは、雨がその不訪を理由付けるものとして描かれた初めての例である。しかし、事態の把握としてはその通りであろうが、そこに含まれる道綱母の心情を読み説くと雨の描写における夫の不訪の理由付けも微妙に意味が異なつて来る。ここでは、天禄元年四月から六月にかけて昼は三十余日夜は四十余日もその来訪が途絶えてしまつて以来未だ経験したこと無いような憂き目を見せられて、唐崎扨いや石山參詣を試みたが事態の好転は得らるべくもなく、そして迎えた十二月という状況である。夫の通いもすっかり間遠になつてしまつたばかりか、「まして、もしやと思ふべきことも絶えにたり」、もしかしたらとその来訪を期待することまでが、この突然の

激しい雨によつて絶望的になつてしまつたという。それは、兼家自身の内的要因に対する外的要因の発見である。作中道綱母が自邸における日常の中で受け止め作者道綱母が記事化した雨は、初め、夫の来訪への期待を裏切るものとして描かれるのである。それは、夫の不訪という突然訪れた事態を何とか自分自身の中に位置付けようとかが道綱母の葛藤である。更に、昔を思い返してみれば、雨や風をものともせずに通つてきてくれたのに、今日のこの雨の中を押してまで来てくれることなどはましてあるまいと嘆く。この激しい雨という外的要因に対する兼家の対応が、道綱母にとってはその愛情の程を測る手段として受け止められ、結果、その不実を決定的なものとして突き付けられる形となつてゐる。この「まして」の繰り返しが、道綱母の動揺と苦悩の深さを物語る。そして更には、同日のこととして次のような表現もある。

雨の脚おなじやうにて、火ともすほどにもなりぬ。南面にこのころ来る人あり。……わきたぎる心をはかたはらにおきて、……「あはれ、これにまさりたる雨風にも、いにしへは、人の障りたまはざめりしものを」と言ふにつけてぞ、うちこぼるる涙のあつてかかるに、

同じく兼家の不訪を語る雨の描写には違いないが、そこには道綱母の心情が「わきたぎる心」と描かれる。同居中の妹のところへ、この雨を押して通つて来た人の足音を聞くにつけても、煮えかえる心なのだと言う。そこには、いわれない苦悩を与え続ける夫兼家への激烈な非難・反発の感情が見てとれる。加えて、侍女がこれよりひどい風雨の時にも殿様は苦にもなさらなかつたのにならぬと

ても熱い涙が溢れ出る。夫に見捨てられようとしている我が境遇を
思つて涙するのだから、裏返しての夫を求めてやまない心の表れで
ある。更に、所在なく降り続く雨に際して「尽きせぬものは涙なり
けり」とも書く。

それが、天禄二年六月の鳴滝参籠・同七月の再度の初瀬参詣を経
た後の雨の描写に伴う心情は、次のように変わる。

にはかにかい曇りて、雨になりぬ。たふるるかたならむかしと思
ひ出でてながむるに、暮れゆく気色なり。いといたく降れば、
障らむにもことわりなれば、
(天禄二年十二月)

兼家の不訪を理由付ける雨が降り始める。それを、作者は、「こと
わりなれ」と言う。つまり、雨に妨げられて来ないのを無理もない
と認めようとしているのである。これは、同年六月の鳴滝参籠から
下山した後の半年のうちに起こつた変化である。もつとも、その後
に引き続いて「昔はとばかりおぼゆるに、涙のうかびて、あはれに
もののおぼゆれば」とあるから、決して諦観という域ではない。そ
して、それが、下巻になると、更に次のような表現になる。

今日までおとなき人も、思ひしにたがはぬこちするを、今日よ
り四日、かの物忌にやあらむと思ふにぞ、すこしのどめたる。十
七日、雨のどやかに降るに、方塞がりたりと思ふこともあり、
(天禄三年二月)

つまり、雨という理由の他に更なる外的要因として「物忌」「方塞
がり」という理由を見だして「すこしのどめたる」と自分を納得さ
せようとしているのである。

十六日、雨の脚いと心細し。明くれば、この寝るほどに、こまや

「かげろふ日記」下巻の性格 — 天禄三年の日録的記事の検討から —

かなる文見ゆ。「今日は、方塞がりたりければなむ。いかがせ
む」などあべし。
(同 閏二月)

ここでは、「方角がふさがっているから」という内容を含む兼家の
手紙を「こまやか」と肯定的に評している。それは、兼家にのみ
執着しその愛情の薄れを嘆き恨んでいた感情の激しさが影を潜めた
代わりとして獲得された道綱母の心であろう。しかし、それをその
まま諦観の域に達した証拠だと解する訳にはいかない。なぜなら次
のような表現も見られるからである。

閏二月のついたちの日、雨のどかなり。それよりのち、天晴れた
り。三日、方あきぬと思ふを、おとなし。四日もさて暮れぬる
を、あやしと思ふ思ふ、寝て聞けば、

つまり、方角がふさがっているという理由を認めただけで、通つて
来ないということ自体を認めた訳ではない。「方あきぬと思ふを、
おとなし」と書く。方角がふさがるといふ外的要因がなくなれば来
てくれるかもしれないと望みをかけて待っているのである。閏二月
の一日の日、雨がのどかに降っている上に方角までふさがっている
から、来ないのではなく来れないのだと思う、三日の日は天気も回
復したし方角も空いたのに來ない、四日も来ないままで暮れてしま
った、それが「あやし」なのである。そこには、不思議だ不思議だ
と首をかしげている道綱母が存在する。それは、兼家の愛情に期
待をかける道綱母の姿以外の何ものでもない。彼女は、夫の通い
を指折り数えて待っているのである。これは、諦観に至り着いた
姿とは決して言えない。彼女は単に兼家に向かう方法を変化させ
ただけに過ぎないのである。兼家の来訪・便りを待つ切実なその姿

については既に触れたことがあるので詳述は避けるが、それは、天禄元年四月に「待つほどすぐるこちす。あやしと、人知れず今宵を心見むと思ふ」とあつて以後、石山参詣から鳴滝参籠に至るまでの間に頻繁に表れ、再度の初瀬参詣から帰宅後「むべもなく、待つに、見えずなりぬ」と記されたのを最後として、下巻には一切描かれなくなる。しかし、だからと言って夫を待つことを諦めたというのではなく、夫を求めてやまない気持ちの表し方が変わっただけなのである。初め、激しい雨がばらばらと音をたてて降ることにはつと気づかされた道綱母は、夫の愛情の薄れは感じるにしても、そのわずかに残った愛情をも妨げる要因があることに気づく。しかし、「これにまさりたる雨風にも、いにしへは、人の障りたまはざめりしものを」という侍女の言葉からも知られる通り、雨風に妨げられるというのは外的要因ではあつても、それを押してまで来るか来ないかは兼家の問題であるから、自分を一妻妾として遇すべき夫である兼家その努力を怠っていることに對する反発は激しい。しかし、物忌みとか方塞がりといった要因は兼家自身の気持ちによつて左右することの不可能な或はできにくい、いわゆる完全なる外的要因だと言える。そして、その完全なる外的要因を発見した鳴滝下山直後の時点で激情の鎮静化という現象も起つて来るのである。それは、物忌や方塞がりという理由に自己の救済の糸口を見出だすことができたからに他ならないのではないだろうか。そして、それは、諦めの姿勢ではなく、むしろ兼家の一妻妾としての自己の立場を維持・確保したい道綱母の姿である。

更に、その外的要因を道綱母が認めるに至つた経緯を見てみる

と、それが一層明らかになると思われる。兼家の途絶えに理由を見出だそうとする道綱母の姿を全て取り出してみると、次のようになる。

ア. 「方はいつかたか塞がる」といふに、数ふれば、むべもなく、こなた塞がりたりけり。「いかにせむ。いとからきわざかな。いざもるともに近きところへ」などあれば、……………」………
 れいの六日の物忌になりぬべかりけり」など、なやましげにいひつつ出でぬ。……………物忌果てむ日、いふかききこちそそひておほゆるに、六日を過して七月三日になりたり。

(天禄二年六月)

イ. かくて、その日をひまにて、また物忌になりぬと聞く。あくる日、こなた塞がりたる、

(同 七月)

ウ. 今日より四日、例の物忌とか、あきて、ふたたびばかり見えたり。

(同 同)

エ. 方塞がりたれば、むべもなく、待つに、見えずなりぬ。

(同 十二月)

ア. それより後、「司召にて」などで、おとなし。

(天禄三年一月)

Ｂ. 今日までおとなき人も、思ひしにたがはぬこちするを、今日より四日、かの物忌にやあらむと思ふにぞ、すこしのどめたる。

(同 二月)

Ｃ. 十七日、雨のどやかに降るに、方塞がりたりと思ふこともあり、

(同 同)

Ｄ. その五六日は例の物忌と聞くを、「御門の下よりなむ」とて、

文あり。

E・七日は方塞がる。

() 同 ()

F・三日、方あきぬと思ふを、おとなし。

() 同 閏二月 ()

G・六七日、物忌と聞く。

() 同 ()

H・一日の日より四日、例の物忌と聞く。

() 同 三月 ()

I・このごろ司召とて、例のいとまなげにのしるめる。

(天延元年一月)

中巻の用例をAからEまで、下巻の用例をAからIまでと分けてみたが、この姿勢は、天禄二年六月、鳴滝参籠から兼家によって強引に下山させられたその日の二人の会話の中に初めて表れる。Aの例がそれである。兼家は道綱母に向い、「方角はどちらがふさがっているか」と尋ねる。作者は、「むべもなく、こなた塞がりたり」と素直に受け止められない道綱母の心を描くが、兼家が方角はあいでも例の六日の物忌になってしまふと言つて出て行く様子を、「なやましげ」だと好意的に描く。そして、物忌が終わる日には、果たして来てくれるかどうかと「いぶかしきこち」が加わったりもすると、言い換えれば、その言葉を受け留め、その物忌が終わるのを心待ちにしている心を表出する。結果は、夫の裏切りに終わるのだが、それ以後、IからIまでのように夫の障りに理解を示そうとする姿が集中して描かれる。道綱母は、物忌が終わつたら来ようという兼家の言葉を信じ、それに頼みかけることから、夫が来ないのではなく来れないこともあるのだということに気づくのである。もちろん、結婚後十五年も経って女盛りも過ぎようとするれば、兼家の愛情が往年程ではなくなるのは致し方ないことであろう。しかし、

「三十日三十夜はわがもとに」とその愛情の独占を高らかに口にするような状況ではなくなつたにしても、そこには、夫を求めてやまない心情が尚も綴られており、兼家の一妻妾としての自覚は少しも損なわれることはない。従つて、この物忌みや方違え等の記事が記されるのは、夫の来訪を期待する気持ちが続いている証拠と受けとめることができる。作者は、下巻に至って「いまはものとおぼえずなりにたれば、なかなかいと心やすく」といかに苦惱から解放されたかのようなことを言いつつも尚、A・Fの波線部分のように未練がましく「おとなし」即ち、音さたがないとその心の揺れを伺わせるようなことを書く。又、Bのように、あの物忌かしらと思うと少し気が楽だと、夫の途絶えが少し長くなると不安を覚えずにはいられない自分というものを暴露してもいる。従つて、やはり諦観という域には程遠い道綱母が存する。それなのに、天候描写においては「のどかな」「のどやかな」という修飾語がこだけに集中して盛んに使われるのである。そうすると、それは作者の穏やかな心境がそのまま反映したものであるのではなく、むしろ、兼家にのみ執着する自分自身というものの呪縛から解き放たれて精神的安定を得た勝者として自己を位置付けようとする作者の意識的操作と受けとめるべきなのではないだろうか。天禄三年にのみ描かれる日常の世界での好天候の叙述も、もちろん記録としての日記の形態に学んだものではあるが、その意味は、何の意識的操作もなくただ筆の赴くまま書かれたのではなく、穏やかな日常を獲得しようとする作者の心理が殊更そこに目を向けさせることになつたと理解できるのではないだろうか。天禄三年ののどかな雨の描写は三月ま

でしか出てこないが、物忌等の理由付けもIを除けば他は全て三月までで終わる。人事に支障とはならない「晴れ」類の描写も六月の⑩、八月の⑪を除けば他五例は全て閏二月までである。勿論それ以降は記事の性格が変化してくるといふ理由も考える必要はあろうが、しかし、この日録の記事の後には、兼家の動向に触れられることはあっても、その物忌や方塞がりのことについて記されることは一切ない。

以上のように見て来ると、鳴瀧参籠という一大事件を契機としてそれ以後の中巻末部に、夫に対する姿勢の変化、平静を得たいとする意識が芽生えることになる訳だが、新たに下巻が起筆された時点で諦観が完全に確立されて書き初められたとは言えない。少くともその初めのうちは、兼家の物忌や方違え等の支障となる条件を排除し去って行きながら夫の来訪を待っているところに、守屋氏が言われるとおり、求心的方法から遠心的方法への転化を遂げつつも、依然として兼家を求める気持ちは続いていることを伺わせる。にも関わらず、穏やかな天候が殊更描き出されるのは、そこに穏やかな心に達した姿として自己を据えようとした作者の意識的操作が施されているからと考えられる。そうすると、それは、むしろ諦観を獲得せんとする作者の営みを反映するものと理解する方が妥当なのではないだろうか。そこに、下巻が身辺雑記の性格を有して中巻の余波で書き進められたのではなく、下巻起筆の意図は、作者の積極的な必然性によるものと解すべき理由が存すると思われる。

この日録の記事の後、天禄三年三月から、道綱の恋愛贈答歌が展開される。そして、天延元年八月、父のはからいで中川転居が行わ

れる。その新しい屋敷へは、兼家は一度も訪れることがなかったようである。その兼家を迎えることがなくなつてから約一年半の間の記事が尚も書き続けられなければ「かげろふ日記」は終わりを迎えることにはならない。そこに新たに展開されるのが、遠度の求婚である。川村氏は、それに、作者の代償行為という積極的な意味付けを行つておられ、注目される。天象の問題から見ても、本稿で検討したもので以後、又更におもしろい発展を遂げる。これらの日録の記事以外の世界については、稿を改めて考察したい。

註1 引用は「日本古典文学全集土佐日記蜻蛉日記」による。ふりがな省略。

註2 木村正中氏「蜻蛉日記の主題」「一冊の講座 蜻蛉日記」

註3 犬養廉氏「蜻蛉日記の構造」「一冊の講座 蜻蛉日記」

註4 守屋省吾氏「蜻蛉日記下巻の研究と解釈」「一冊の講座 蜻蛉日記」

註5 伊藤博氏「蜻蛉日記研究序説」

註6 三田村雅子氏「蜻蛉日記の物語」「一冊の講座 蜻蛉日記」

註7 多田一臣氏「歌のわかれ」「語文論叢」第十号

註8 拙稿「かげろふ日記の自照描写と物語で―視覚・聴覚の視点から―」「中古文学」第四十六号

註9 註5に同じ

註10 註7に同じ

註11 川村裕子氏「蜻蛉日記下巻の一考察―遠度求婚譚をめぐって―」「立教大学日本文学」第五十二号